
天国行きのバス

ねぎかぼちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国行きのバス

【Nコード】

N6814I

【作者名】

ねぎかぼちゃ

【あらすじ】

喧嘩して家を飛び出した彼女をあわてて追いかけたら、色々あって天国行きのバスに乗ることになった。

天国行きのバスに乗るためにバス亭に着いたら、バスが来るまでまだまだなので、同じくバス待ちおじさんと、ちよつと生きてる間には出来ない内容を腹を割って話し合う。

笑いあり？涙あり？愛憎あり？

天国ってなんなんでしょう。

ブローグ：天国行きのバス亭で

モヤモヤ

モヤモヤ

モヤモヤ

モヤ

「あーっ！なんなんだよこの霧は！ちつとも前が見えねえじゃねえか！こんな所に本当にあんのか」

俺は文句を言いながら霧につつまれた方向に目を凝らす。ぬぬぬ、すると5mほど先に、縦に細長くて上に丸が乗っているものが見えてきた。

「お、あれじゃないか」

近寄ってみると目的の物体、体は縦に細長くて12 10 だとか数字が書いてある、そして頭には丸が乗っていて、名前が書いてある。丸にはこう書いてあった「地上乗り場」

そうバス停がそこにはあった。

~~~~~  
+天国行きのバス+~~~~~

え〜とどれどれ、次のバスの時間は、と。んー、まだ時間があるな、かといって携帯は圏外だし（当たり前か）暇つぶしできるものもないし、どうしようかな。とりあえずベンチに座るか。

「よっこそらせ」

オッサンくせー、と自分で思いながらもベンチに腰をかける。すると既に先客がいることにきづいた。

30代後半くらいのスーツ姿のおじさん。背筋はピツと伸びていても姿勢がよく、オールバックの髪型がより精悍な雰囲気をもしだしている。いかにも仕事ができそうな人だ。

「おじさんもバス待つてるんですか？」

普段の自分なら考えられないことだが、場の雰囲気<sup>ふくみ</sup>に当てられたのか、お互い死んでいる、いわゆる死に友（？）<sup>しにとも</sup> っていう共感<sup>きかん</sup>からか話しかけてみることにした。

おじさんはこちらを一瞥<sup>ひとくち</sup>して返事<sup>へんじ</sup>をしてくれる。

「そうだよ。もう随分待つてるんだけどね。タイミングが悪かったみたいなんだ」

「ふーん。よかつたら少し話しませんか？あ、自己紹介<sup>じこしょうかい</sup>が遅れましただけど俺、春原<sup>はるはら</sup> 大介<sup>だいすけ</sup>って言います。」

「よろしく頼むよ、春原君。僕も少し待ち飽きたところなんだ。僕の名前は香川<sup>かがわ</sup> 文人<sup>ふみと</sup>だよ。」

「香川さんですね。わかりました。死に友としてよろしくお願いし

ます」

「し、死に友？」

「そうです！もはや俺達は文字通り肉体を超えた関係なワケです！」

親指をビシツとガ上げて香川さんに向かって腕を掲げる。ついでにキラツと齒を光らせる。そう、やっぱ楽しくやらなくちゃね。いきなりのユーモアの利いたギャグで場を和ませうって算段さ。

だが困ったことに腕を掲げた先の香川さんはポカーンとしている。し、しまつたいきなり滑ったか？！ジェネレーションギャップなのか？！それとも半ば下ネタなのがいけなかったか？！しかしこの世に下ネタが嫌いな男などいるはずがないだろう？！

あまりに空気が静まり返ったので焦りだす。心の中でなんとか場をなごませようと、ギャグを考える。いけー！でろー！俺の22年のギャグの結晶よ！！と、頭をフル回転させていると、ポカーンとした表情だった香川さんはいきなり大きな声で笑い出した。

「あははははは、そうだね。春原君ありがとう。君は面白い人だな。」

よ、よかったああ。話しかけたもののつめたい雰囲気の中、会話が弾まないなんてことになったら会話がなほうがまだだからな。結果オーライ！やはり下ネタは全世界の男共通のギャグだった。

「でしょー、もつとほめてくれていいですよ。まあ、もう死んじまつてこれ以上落ちようがないんですし、明るくいきましょう。」

「そ、そうだね」

香川さんは涙目で、まだプスプス笑っている。何かがツボに入っただようた。

さあて、そして息つく暇もなく新たな問題が浮上してくる。場が和んだのはいいものの、困ったことに

これといって話題がない。後先考えず話しかけたが、俺と香川さんの間で共通しそうな話題なぞ皆目検討もつかん。

政治？経済？ダメだ俺がまったくわからん、小。元総理がマーシャに強いことくらいしかわからん。今、確かナチスと打ってるんだよな。イカンイカン脱線した。とにかく何かないか。

そうやって俺が再びうなっていると。香川さんから話しかけてきた。

「君はどうしてここへ来たんだい？」

おお、そうだ！それだ！思わず感心した。そう、ここに居るということは皆、何かあって死んだということ。それつまり共通の話題に違いない！なんかズレてる気がするがそうだろう！流石、香川さん。大人の貫禄だぜ。

「ごめん。変なことを聞いてしまったね。」

感動して少し間を持たせてしまったのが誤解され気を使われる。俺はぶんぶんと手を振り慌ててフォローにはいる。

「いや！そんな事ないですよ。ただ、自分でも絞まらないなーって思う話で。それでもいいですか？」

「もちろん。なんだかここの雰囲気のせいか、そんな事が気になってね。」

確かに、この霧に包まれた空気は周りの情報が入ってこないせいか、否が応でも自分の状態のことを考えさせられる。そんな中に人が居ればこんな質問もしたくなるだろう。

「本当に絞まらない話なんですけどね……」

そういつて頬をポリポリかきながら、話を始める俺であった。

## プロローグ：天国行きのバス亭で（後書き）

初めまして。ねぎかぼちゃと申します。

初めての小説投稿で非常にドキドキしています。つたない文章ですが、大事な処女作なのでお付き合いいただけると幸いです。

ご感想、批評（厳しめ）、いつでもお待ちしております！

俺の場合編　：　バナナ、それは案外滑る

「なんでよ！今日は付き合って一年記念日だよ！忘れちゃったの？」

目の前でデカイ声を出して癇癪を起こしている女が居る。こいつは俺の生きてた頃の彼女で桐宮きりみや 佳奈かなという。

大学1年のときに同じサークルで出会い、2年かけてやっとの事で口説き落とした愛しの天使だ。マイエンジェル なんとその間4回も告白したんだぜ。すごくね？

「ホントごめんって。これからバイトなんだよ。絶対どこかで埋め合わせするから」

彼女に向かって手を合わせる。この女見た目は可愛いんだけど、いかんせん性格がややキツイ。初めて見かけたときとかホント天使だと思ったんだよな。蓋を開けたらあくま、だっただけどな、懐かしい。

まあそんなS入った彼女だが俺はMなので何の問題もない。むしろ罵倒されるのは大歓迎だぜ（ルパン風に）てなもんだ。だがこれは自分に非がある事なので少々申し訳なく思う。つつか付き合った日とかよく覚えてるな。

「バカ！アホ！ドジ！鳥頭！」バシバシ

罵詈雑言をあびせかけながらバッグをブンブン振り回して俺を殴ってくる。おお、この痛みたまらん…じゃなくて！

「いてえ。あで、ちょ、金具がマジにいてえ。だからごめんて、わかった。できるだけ早くバイト終わるよう頼むから待っててよ」

「うるさい！ドM！レイパー！死ね！」ブンブンブン

「うえ、ふが、人聞きの悪いことを言うな、あぶふ、あと何度も言うが俺はドMじゃない、ハードMだ」

「うるさい！！痴漢男！変態！！」ビュオン！バコーン

ひとしきり罵詈雑言を叫んで締めの一撃を繰り出すと、走って玄関を出て行ってしまった。いてえ…鼻血が止まらない。しかし朝っぱらからなんつー卑猥な言葉を……。

いいですかまだ22というつら若き乙女、ましてや俺のエンジェルがそんな単語を使うなんて…。女子としてあるまじきことではないですか？

…  
だがそれがいい。（↑香川さんは「う、うん…」みたいなリアクシ  
ョンだった）

話を戻そう。拗ねた佳奈が出て行くのはよくある話で、ここで重要  
なのが、ちゃんと追いかけてやらなくてはならないということだ。

以前、似たようなシチュエーションで放っておいたら戻ってきて

「なんで追いかけてくれないのよ！」

と言われて、股間を蹴り上げられた。正直アレはハードMの俺でも  
きつかった。ゴールデンボールとは体外に出た内臓でだな、その辺  
の説明はカットするけど（詳しく知りたい人は烈。王氏に聞いてみ  
よう）ホント悶絶した。その日はずっとたてなかった。

そんな半殺人事件みたいなことがあったので、二度と同じ過ちを繰  
り返さないためにも、佳奈をすかさず追いかける。

いつもどおりの交差点を渡ったところで待っている。わかりやすい。

「おーい、佳奈ー」

大声を出して呼びかける。信号は赤だが大丈夫だろ。俺は思いつき  
り信号を無視して横断歩道を駆け抜ける。

プワァー！！プワァー！！

「あ、大介！危ない！」

佳奈が叫ぶ。横からダンプが突っ込んでくる、フッそんな事は百も  
承知！俺の特に鍛えていない脚力をもってすれば！わたりきれる！

全力疾走し駆け抜ける、そして最後の一步を大きくジャンプ！！華  
麗に着地してお前に向かつてこう言うのさ

「心配かけさせんなよ」

と、もちろん齒を光らせて。

さあ、着地だ！どりゃああー！！

その時のことホント冗談と思いたい。いやな、着地までもいったん

だわ。ちゃんと。そこまではしっかり計算どおり。

だけど俺の脚が大地を踏みしめることはなかったんだ。着地点に…その…今時ねえだろって感じだけど…バ、バナナが置いてあって、それに滑ってドカーンと。

最後に言っ て や っ た ね

「そんなバナナ」

~~~~~

「これが俺がここに居る理由です。」

なんとも恥ずかしい。そして情けない壮大な話だ。もはや逆に悲壮感すら出ん。

「そ、そうか。 プスプス 大変だったね。」

途中までは神妙な顔をして聞いていた香川さんだったが、今は鼻をプスプスさせている。

「笑ってくれてもいいですよ。というか笑ってください。そうじゃなきゃ浮かばれません！」

そう！芸人として！ただ死んではいけないのだっ！芸人じゃないけど。

「いやいや（プスプス）人として（プス）そんな事はでき（プスプス）ない」

「めっちゃプスプスなってますよ！いつそ笑って下さい。」

その後プスプスが収まるまで時間を要する香川さんであった。死因すらネタにできるこの場所に感謝だ。

「もう、次は香川さんの番ですよ。僕だけに話させて教えないなんて無しですよ。

いやでも聞きますから」

「ああ、そうだね。春原君にだけ話させるのは確かに不公平だ。ただそんなに面白い話ではないけど、構わないかい？」

気のせいだろうか、香川さんの顔が一気に暗くなったような気がする。これは触れちゃいけない。しかしなぜか聞かずには居られない。そんな心があった。

そしてそれが勝ってしまった。

「いいですよ。お願いします。」

「そうか、それじゃあ。結果から言つとね、私は妻に殺されたんだ」

香川さんの場合編　：　キモチと、きもちと、気持ちと、

「ねえ、今日も帰りは遅くなるの？」

「ああ、ごめんね。先に寝ていてもいいから。」

私はその日もいつも通り朝6時に家を出た。玄関で私を見送るのは妻の真奈美。

さっきの春原君の話を聞いて、君と私は似ていると思ったんだ。なんと彼女も僕が大学生の頃何度もアプローチして付き合った人だったんだよ。

社会人になって一年目で私達は結婚した。子どもができたんだ。今で言うできちゃった結婚てやつなのかな。

学生から毛が生えた程度の私達だったからね。結婚当初は本当にお金がなくて。私はなんとか彼女を楽させてあげたくて必死で仕事に打ち込んだ。

毎日毎日。何年か経った時に仕事がつましく軌道に乗り出してね。それなりに楽をさせてあげられるお金を家に入れられるようになっていたんだ。

ただそれに比例して家に居られる時間はどんどん少なくなっていて

ね。帰りも遅くなつて12時を過ぎるなんて当たり前だし、休日も仕事をするようになった。

妻は私がどんなに空けるのが遅くても起きて待つていてくれた。それが嬉しくて私は余計に頑張った。

「今度の日曜日休み？」

「仕事なんだ」

「そう…頑張つてね！」

申し訳ないように言うと、妻はいつも笑顔でそう言ってくれたなあ。ただ笑顔の前に寂しそうな顔をしてね。それが申し訳なかったよ。そんな日が何年も何十年も続いてね。

そして最近、私が、死んだ時だね。

その日の朝もいつも通り6時に家を出ようと思ったんだ。いつもなら妻は笑顔で見送ってくれるんだけどね。その日は違ってた。泣いていたんだ。

驚いたよ、同時に怒りもこみ上げたよ。誰だ！私の大切な人を泣か

せたのはぶん殴ってやる！ってね。

慌てて駆け寄ると妻はしきりにごめんなさい、ごめんなさい、って言っているんだ。いったい何のことだがさっぱりわからなくてね。

泣いている妻に駆け寄ると、お腹にドスっていう衝撃が走ったんだ。

生温かい感触が広がっているな、と思って下を見ているとお腹に包丁がささっていたんだ。

何のことだかさっぱりわからなかったよ。だってその包丁の先には妻の手があるんだから。

そのまま血を吐きながら私は倒れたんだ。

倒れた私にすがりつきながら妻はごめんなさいと繰り返している。薄れていく意識の中で私は声を絞り出したよ。

「僕……が嫌……いに……なの？」

妻は首を振って掠れた声で答える。

「ちが……ちがう……好き……大好き……。だからごめ……んなさい」

「ど……う……って」

「ごめんなさい、もつと…わたしの傍に居て。わたしを見て…。仕事じゃない、私を。ずーっと、ずーっと大学生の頃より、結婚した頃より、子どもが生まれた頃より、…あなたが好き…なの、30年経った…今でも…だから…寂しいの、苦しい…。ずっとずっと我慢してきたけどもう笑顔でいれないの。ごめんなさい、ごめんなさい」

泣きながら話すから途中が掠れかすれになるし、意識も遠ざかっていくからよく聞こえなかったんだけど、どうやら嫌われたみたいじやなかったんだ。

そこは本当に安心したよ。それでも妻を泣かせている原因は自分にあつた事だけはわかってね。

これは本当に困った、妻のために、妻のためにと思ってたってきたことが結果、苦しめることになっていたなんて。僕は自分で自分を殴らなくてはいけないみたいだ。

ダメだ。意識が遠くなっていく。妻の泣き声も遠くなってきた。自分を殴ることはできなさそうだ。ああ、泣いている。僕の胸で泣いている。何か言わなきゃ、彼女の涙を止めなくちゃ。

「気づ…なくてごめ…ん。僕も…ずっと…」

~~~~~

「というわけさ。今思えば、私は彼女の笑顔を見たかったはずなんだけどね。

どうしてなんだろう。ここ数年の記憶は少し難しい顔をして笑っている妻しか

見ていないな。僕は間違っただろうか。」

「……。」

俺は無言で泣いていた。なんで涙が出るんだろう。何て答えたら言いかかわからない。

ご愁傷様でした以外にもっと人をいたわれる言葉はないんだろうか。

「泣いてくれてありがとう。同情でも嬉しいよ。」

香川さんは優しく微笑みながらそう言った。

「同情なんかじゃないです！これはなんていうか、何だろう、寂しいのか。ああ、もうとりあえず絶対、同情ではないです。その…なんだろう、一つ聞いてもいいですか？」

どうぞ、と目で促される。

「奥さんが…憎くはないんですか？」

香川さんは目線を斜め上に上げて少し考えるしぐさをした、随分と長い間考えた後で

「それがね、全然。むしろ妻をそこまで追い込んでしまった自分が許せないくらいだよ。」

「…そうですか」

なぜだろう、寂しさと同時に温かい気持ちにもなるのは。

## 最終話　：　天国

プシュー

気が付けばもうバスが来る時間だったようだ。俺と香川さんが座るベンチの前にバスが止まっている。行き先はもちろん天国。

「さて、それじゃあ逝こうか」

「香川さん、字間違ってますよ。この状況じゃ正しいのかな？」

その冗談を期に空気を切り替えて俺達はゲラゲラ笑いながらバスに踏み出す。

バスに乗ると運転手さんがやってきた。なんともまあスタンダードな運転手姿だ。

顔が骸骨になっていると言っ点を除けば、地上に居る運転手さんとなんら違いはない。

…まあその違いがでか過ぎるんだけど。

香川さんと無言で「じ、こええ」と目配せしあう。

こっちが恐怖で半ば固まっているとカラカラと骸骨運転手がしゃべり出した。

「オキヤクサンＹＯ、乗車券をミセテくれＹＯ」

「なんでエセ外国人のラップ調なんだよ！天国にもラップブーム到来してんのかよっ！！」

一瞬で恐怖はぶっ飛んだ。いや、だってＹＯだぜ、ＹＯ。俺じゃなくてもツツコむっつの。おい！

そのＹＯの指でポーズとるのやめろ！骸骨のカタカタ音をリズムカールに鳴らすな！

「春原君落ち着いて！」

「香川さん！止めないでくれ！ツツコませてくれ！！」

「もうツツコんだじゃないか。」

「まだ、足りねえええええ！！！！」

俺の叫びは空しくスルーされていく。しかしそれは置いておくとして、何か気になることを言ってたような…乗車券？

「えっと、乗車券でなんだ？」

「YO！YO！天国行きの乗車券！来るときちゃんと貰ったRO！」

「え…そんなのあったっけ？香川さん持ってる？ちよつと骸骨ラッパ―（仮）黙れ」

YO！YO！うるさい骸骨ラッパ―（仮）を黙らせて自分のポケットをまさぐりながら聞いてみる。

「持っていないYO！」

「香川さん?! 落ち着いてください!」

「ああ、ごめん。写っちゃった。しかし、私も持っていないみたいだ。」

まさか、冷静ダンディキャラの香川さんにまで影響を与えるとは、意外とやるやつなのか…。

「困ったね……」

本当に困った、ってかなんで天国に行くのに乗車券がいるんだ。

「YO!YO!持っていない奴HA!天国いけNEEEEE!お前らここでおさらBA!また次の機会DE!」

そういうと骸骨ラッパ（仮）はケタケタと大きなラップ音を出していきなりドンッ！と俺達をバスから突き落とした。

キューン

突き落とされた先には……なんと地面がなかった。あれが地面だったのかは知らないが。

「死にたくねえええええええええええ」

「もう死んでるよおおおおおお」

香川さんナイスツツ コミだぜ！なんかキャラ変わってる気がするが

気のせいだろう。

落ちていく中で考えていた。いつからだろうか？乗車券がないと気づいたときからだろうか？香川さんの話を聞いてからだろうか？ここに来て当たり前に受け入れていた死を全力で否定しなくなっている自分が居た。

ズゴン！！！！

うええ、こ、ここはどこだ…。俺、生きてるのか？いや、死んでたから、生きてるのか？って言うのもおかしいけど。と自分の状況を把握しようと重いまぶたを必死で開いていくと

「ちょっと大介！起きてるの！こっちを見て！！」

うるせーな、こちら天国の手前から突き落とされたところなんだから、んなでけー声だすなよ。何考えてんだよ佳奈の…。や…。っ？

あまりにも懐かしい声を耳にして必死でまぶたを開けて声のするほうを見る。

「佳奈…」

「うっ…大介…」

「佳奈」

「大介ー！」

なんという感動の再開か。死んだと思ってた俺生きてたぜ？まさに不死身の男！全米が泣いた感動の嵐！そして生死を越えた男女（俺と佳奈な！）は愛を語り合う！これ定番。

さあ来るぞーと思っていると、佳奈は俺に向かって顔を近づける。  
OK。お前の気持ちはよくわかった。スリープエンジェル目をつぶって受け入れ態勢を作る。そのまま二人の距離は近づき。

「アホかー！ー！！！！！」

ヘッドバットをされることになった。

「い、いてえええええええ。お前シャレになってねえぞ！ダンプに轢かれた人間にんなことするか普通！」

「何がダンプよ！あんたバナナに滑って後ろにあった電柱に頭ぶつけてここに運ばれたんじゃない！」

「…え？マジで？」

「マジで。」

ジト目で俺を思いつきり見てくる。あははは、そうかー、滑った先に電柱があつたのね。

なんか…ますますかつこわりいな俺…。電柱に激突して臨死体験だよ。そりゃ乗車券持つてねーわ。チーン。

「そうか、そうか、死に損なつたな」

バツが悪くなったので目をそらして、うん、うん、とうなずきながら頭をさする。

「なーにーが！死に損なつたよ！アンタね、ほんとうに、いちじ…  
きはあぶな…ヒック」

ヒートアップしていた声が一気にしぼんでいく。ハテ？どうしたも

のかと佳奈のほうを見てみると目一杯に涙を溜めてこらえていた。

驚いたなんてもんじゃない。始めてみてからここ、この女の泣いている姿など見たことがない。どんなに大喧嘩しても決して涙は見せなかった。俺の…せいだよな？

「あの…その…ごめん」

それで全てが決壊したのだろう。佳奈は俺に抱きつくとき大きな声で泣き出した。

「ヒック、ヒック、ばか、あほ、どじ、とうへんぼく、ばななまじん、でんちゅうおとこ、しないないで」

ああ、なんて自分は愚かだったんだろう。そうだ。忘れてたよ。乗車券持つてなくてよかった。

泣かせたくない人を今以上に泣かせるところだった。優しくできるだけ優しく、もたれかかる佳奈を抱きしめる。

「ごめんな。うん、俺、生きててよかったよ。大好きな佳奈のこと危なく置いていくところだった」

「うつん…ごめん…私のせいで…ヒック、ヒック」

それから数十分位してようやく佳奈は顔をあげた。俺と佳奈は見詰め合う形になり徐々に距離が近づいていく。もう少し、もう少しでぶちゅーっと。

と鼻息を荒くしている佳奈の胸ポケットからなんか出てるのが見えた。半透明の紙みたいに見えるんだがそこに書いてある文字が問題だ。

気のせい…か？いやもう少し近づいてみないと。俺は佳奈に向かっていく顔を胸ポケットに軌道修正して近づけていく。本来ならこのシチュエーションでこんなものは目に入らないんだが、そこにあった文字は俺の目を完全に固定してしまっている。

そしてついにハッキリ、シッカリ、バッチリ見えた文字には

「 天国行き 」

と書いてあった。

「!?!あqwseftylp:@…」

パニックになつて声にならない声を上げて佳代の胸ポケットから紙切れを鷺づかみにする。

「ここここ、これは?!?!?て、天国行きのチケットじゃねえかな、ミルキーハートエンジェルなんでお前が…ゲファ!」

渾身の右チヨップが見事に上から炸裂する。何度も言うがダンプに轢かれてないとはいえ、死にかけた怪我人だぞ俺は。

「な、なにすんだよ…」

「なにすんだじゃないでしょ!!いきなり人の胸を鷺づかみにしていてよく言つわね!!こんな時に何考えてんの!スケベ!!全身わいせつ物!」

「へ?胸を?」

よくよく見ると右手にはチケット、左手には…佳代のふくよかな胸がばっちりホルドされていた。

動かしてみる。おおっ!スゲースゲー!柔らかいよ。もうちよつと、もうちよつと。モミモミ。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

気のせいだろうか？大気がひずんでいる音がする。そーっと音のする方向を見上げると、見事に鬼の形相に変貌した佳奈がいた。

こ、これは…発言を誤るとまたバス亭に行きかねん。考えろ、ここに最適な答えを考えるんだ！頑張れ！！

「お、お前<sup>オীগ</sup>」

そして搾り出した言葉は

「柔らかくていい胸だよな！」

俺は歯をキラリと光らせて親指をあげて突き出した。

「言いたいことは…それだけかー！ー！ー！！！」

「ゴブフルヘアーー！！！」

見事な右ストレートが顔面に突き刺ささって俺は気絶した。せっかく褒めたのになんでだよ。

薄れゆく意識の中で、天国行きのチケットをお前が持ってたなんて、出来すぎだろと思った。

## 最終話　：　天国（後書き）

お付き合いいただきありがとうございました。ねぎかぼちゃです。

ブログから最終話まで一気に更新させていただきました。つたない文章にもかかわらず粘り強くお付き合いいただいた皆様、ありがとうございます。

感謝感激雨霞です！

はてさて、一応、最終話なのですが、ちょっとしたエピソードをこの後にアップしたいと思っています。

大介、佳奈、そして香川さんの話にもう少しお付き合いいただければ生みの親としては幸いです。

それではまたお会いしましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6814i/>

---

天国行きのバス

2010年12月30日19時25分発行